

聖母女子短期大学

紀 要 創刊号 (1987年 5 月) 抜刷

看護学生の自尊感情と学習環境に
関する研究と今後の課題について その1

<Report on the Study and Future Topics Concerning Self-Esteem
and Learning Environment of Nursing Student (No. 1)>

聖母女子短期大学

筒井真優美 (Mayumi Tsutsui)

和田サヨ子 (Sayoko Wada)

沢 禮 子 (Reiko Sawa)

聖路加看護大学 St. Luke's College of Nursing

高木 廣文 (Hirofumi Takaki)

【原 著】

看護学生の自尊感情と学習環境に 関する研究と今後の課題について その1

<Report on the Study and Future Topics Concerning Self-Esteem
and Learning Environment of Nursing Student (No. 1)>

聖母女子短期大学

筒井真優美 (Mayumi Tsutsui)

和田サヨ子 (Sayoko Wada)

沢 禮 子 (Reiko Sawa)

聖路加看護大学 St. Luke's College of Nursing

高木 廣文 (Hirofumi Takaki)

I. はじめに

看護短期大学の3年間は、学生のアイデンティティの確立にとって重要であり、看護学生の多くは、種々の緊張に耐えうるほどに強固でない自己を見つめ、成長するものと考えられる。又、講義や臨床実習などを通しての様々な人との出会い、苦しみ、喜びなどの各種の経験を経て、看護への認識を深めていく期間でもある。

Rogers, C. R.によれば、感情や体験が自己概念に矛盾する場合、環境に対する否認が生じるものとされる。¹⁾ したがって看護学生に関しても学習環境の受容には自己概念が重要な役割をもつものと考えられる。

自尊感情(self-esteem)とは、自分の価値に関するその人の知覚であり、²⁾ 自己概念の重要な部分を占めている。自分を価値あるものとしてとらえ、他人から尊敬されていると感じる人は、環境を受容し、環境に積極的に適応していくものと考えられる。^{3) 4)}

聖母女子短期大学では、キリストの教え、すなわち聖書を通じて学ぶ人生観を土台として、看護教育を行っている。具体的には、学校生活・寮生活を通しての朝夕の祈りと、カリキュラムの上でのキリスト教概論、人間論、聖書研究、黙想会に

よる体験学習その他の行事による聖書的アプローチである。⁵⁾

看護学生を対象とする研究には、学習意欲、⁶⁾ 7) 看護職への認識、⁸⁾ 学生生活への適応、⁹⁾ 10) 進路選択、¹¹⁾ 臨床実習の受けとめ方¹²⁾などに関するものがあるが、学生自身の内面と学習環境に焦点をあてた研究は少ない。^{10) 12) 13) 14)}

本研究では、看護学生が学習環境を受容するための効果的アプローチに役だてるために、看護学生の自尊感情と、学習環境(教師や友人との対人関係、看護への適応、日常生活における聖書的アプローチに対する反応)の受容に関する因子を検討することを目的とし、あわせて研究結果が示唆する教育上での効果的アプローチと今後の課題について考察した。

II. 対象と方法

本学の全寮制による3年制看護短大生1年生40名、2年生38名、3年生37名、合計115名を対象とし、1984年7月(夏休み前)、1985年3月(学期末)の2回にわたり、質問紙(表2)による調査を行った(表1)。なお回収率は100%であった。

質問紙は46項目からなり、自尊感情の測定は、信頼性の検討がなされている遠藤ら(1974)の自尊感情尺度項目¹⁵⁾(Q1~23)を使用した。又、

表1, 調査時期別, 学年別 対象者数

時期 学年	7 月	3 月
1 年 (人)	4 0	4 0
2 年 (人)	3 8	3 7
3 年 (人)	3 6	3 7
計 (人)	1 1 4	1 1 4

表2 看護学生への質問紙

該当するところに○印をつけて下さい。

1. 1年 2. 2年 3. 3年

以下の質問の該当する答に○印をつけて下さい

- あなたが知っている大部分の人びとに比べて自分の方が劣っていると感じるようなことはありますか。
- あなたは、自分が価値ある人間であると感じていますか。
- あなたは、自分の知っている人びとが、いつかはあなたを尊敬の眼をもって仰ぎみる日がくると確信していますか。
- あなたは自分の過誤（ミス）はいつも自分のせいだと感じるがありますか。
- あなたは自分について落胆するあまり、何が一体価値あるものだろうと疑いをおぼえることがありますか。
- あなたは自己嫌悪をおぼえること（自分で自分がいやになること）がありますか。
- 一般に、あなたは自分のいろいろの能力について自信をもっていますか。
- あなたは、自分にはうまくやれることなど全然ないといった気持になることがありますか。
- あなたは、自分が他の人びととどのくらいうまくやれているかということについて気にしますか。
- あなたは、あなたの仕事ぶりや成績を審査する立場にある人の批評を気にしますか。
- あなたは、他の人びとがすでに集って話合っている部屋に自分一人ではいっていくような場合、気兼ねや不安を覚えますか。
- あなたは人前を気にしたり、はにかみをおぼえることがありますか。
- あなたは、クラスや自分の同年輩の人びとのグループの前でしゃべらなければならないとき、心配したり不安に思ったりしますか。
- 他の人びとがみているところで、ゲームやスポーツをやっており、それに是非勝とうと思

っている場合、あなたはとり乱したりまごついたりしますか。

- 他の人びとから、あなたが職業や経歴における成功者（または優等生）とみられているか、あるいは失敗者（劣等生）とみられているかということについて、あなたは気になりますか。
- 人といっしょにいるとき、あなたはどんなことを話題にしたらいいかについて困りますか。
- とんでもないミスやばかにされるような大失敗をでかしたとき、あなたは長くそのことを気にしますか。
- あなたは、初対面の人に会ったとき、時間つぶしに話をするのがむずかしいですか。
- 他の人があなたと一緒にいることを好んでいるかどうかについて、あなたは気にしますか。
- あなたは恥ずかしくてどうにもならないと思うことがありますか。
- 自分の意見に同意しない人びとを説得している場合、あなたは自分が相手にどのような印象を与えているかということが気になりますか。
- あなたの友達や知りあいのなかに、あなたのことをよく思っていない人がいるかもしれないと考えるときあなたはそのことを気にしますか。
- 他の人があなたのことをどのように考えているかということが、あなたは気になりますか。
- 看護という職業はあなたを生かすものだと思いますか。
- 病院実習は好きですか。
- 自己学習活動や実習に関する日報その他の課題はあなたにとって適当な量だと思いますか。
- 先生とのコミュニケーションに満足していますか。
- 先生のコミュニケーションを持っていますか。
- 学校での友人関係に満足していますか。
- 学校での相談できる友人はおよそ何人いますか。
- 学校での相談できる先生がいますか。
- 看護職に進むことに誇りを感じますか。
- 大学での専門の勉強は楽しいですか。
- 聖書のみことばは両親、自分の存在について感謝の念を増させるものですか。
- 聖書のみことばは看護職に対する「ほこり」を増させるものですか。
- 聖書のみことばは看護職について専門職である以上に「天職への召命」ということをうら

づけますか。

37. 聖書のみことばは医療の複雑な判断を要求される臨床場面で具体的な判断基準の指針となりますか。
38. 朝の祈りは、あなたの1日の始まりに“力”を与えていますか。
39. 夕の祈りは、あなたの1日の終わりに“感謝”を与えていますか。
40. 朝礼に参加することにより、自分に対する感情は肯定的になっていくように思いますか。
41. 聖書は、あなたがケアをする上で指針になりますか。
42. 日常生活の人間関係における問題解決は、聖書が基盤になっていますか。
43. 聖書のみことばによって不安になることがありますか。
44. 聖書に親しむことによって、悩みや葛藤に対する気持は強くなるように思いますか。
45. 聖書によって、友人、教師との人間関係は、日常生活で気になる問題として意識されますか。
46. 聖書に観る人間像と自己像との不一致による葛藤で悩みますか。

学習環境としては、波多野,⁸⁾ 伊藤,⁹⁾ 坂口ら¹⁰⁾が調査項目としてとりあげている、教師や友人との対人関係、看護への適応等に関する項目(Q24~33)を設定し、さらに日常生活における聖書的アプローチに対する反応に関する項目(Q34~46)を設定した(表2)。各項目間の選択肢は、「はい」、「ときどき」、「いいえ」の3段階とし、因子分析にはそれぞれ3, 2, 1の各得点を与えた。

分析は、調査時期と学年により、各項目間のクロス集計をおこなった。次に因子分析(バリマックス法)を行い、さらに抽出した因子の因子得点を求め、各学年間での差を調べるために分散分析を行った。¹⁶⁾ 実際の計算は、東京大学大型計算機センターのHITAC M 280/200 Hを用い、SPSS統計パッケージを用いた。¹⁷⁾

III. 結 果

1. 調査時期別、学年別による各項目間のクロス集計

各項目を、学年及び調査時期別にクロス集計を行った。各調査時期、又学年間に有意差のみられた項目を、表3に示した。

1) 7月のデータ

学年間に有意差の認められた項目は、自尊感情Q9, 19, 22, 看護への適応Q26, 32, 教師との関係Q31, 聖書的アプローチに対する反応Q34, 35, 37~41であった。

自尊感情Q9, 19, 22の3項目は、対人関係のむずかしさに関する項目と考えられ、1, 2年、特に1年が難しいとする割合が高く、3年が低い。

看護への適応Q26, 32の2項目のうち、Q26の自己学習量については、3年が適量でないとするものの割合が高く、Q32の看護職の誇りについては、1年での割合が高く、2, 3年になるほど低くなっている。

教師との関係Q31は、2年が相談できる先生がいないとする比率が高い。

聖書的アプローチに対する反応Q34, 35, 37~41は、1年で肯定的な割合が高く、Q40を除いて3年が低くなっている。

2) 3月のデータ

学年間で有意差のみられた項目は、自尊感情Q1, 6, 10, 14, 16, 看護への適応Q25, 教師との関係Q31, 聖書的アプローチに対する反応Q46であった。

自尊感情Q1, 6の2項目は、劣等感や自己嫌悪に関するものと考えられ、1, 2年、特に2年でその割合が高く、3年では比率が低くなっている。Q10, 14, 16の3項目は、他人の目が気になる、対人関係のむずかしさに関するものと考えられ、1, 2年でその傾向が高く、3年では低くなっている。

Q25は、看護への適応を示し、実習に関する肯定的反応と考えられ、1年でその割合が高く、2年では低くなっている。7月と比較すると、「はい」と答えたものの比率は、1年が32.5%から52.5%に、反対に2年が51.4%から21.6%に変化している。

Q31は、教師との関係を示すものであるが、学校で相談できる先生がいるとする比率は、3年が高く、1, 2年、特に2年が低い。

聖書的アプローチに対する反応を示す項目Q46の回答をみると、聖書と自己の不一致による葛藤があるとする比率は、2年が高く、3年が低い。7月と比べると、1年で27.5%から7.5%に減少している。

表3. 学年差, 調査時期の差が認められた項目

項 目			人 数 (%)												3 学年
			1 年				2 年				3 年				
			はい	時々	いいえ	χ^2	はい	時々	いいえ	χ^2	はい	時々	いいえ	χ^2	
自尊感情	Q 1 劣等感	7月 3月	37.5	47.5	15.0	1.415	39.5	47.4	13.2	1.538	27.8	63.9	8.3	2.811	
			35.0	57.5	7.5		37.8	56.8	5.4		8.1	78.4	13.5	10.656	
	Q 6 自己嫌悪	71.8	25.6	2.6	1.193	76.3	21.1	2.6	0.289	63.9	33.3	2.8	1.484		
		77.5	22.5	0		81.1	16.2	2.7		48.6	48.6	2.7	12.095		
	Q 9 他の人とうまくやっていけるか気になる	67.5	30.0	2.5	0.450	60.5	31.6	7.9	0.664	38.9	38.9	22.2	10.836		
		62.5	32.5	5.0		51.4	37.8	10.8		37.8	48.6	13.5	5.128		
	Q10 人の批評が気になる	70.0	20.0	10.0	2.781	60.5	39.5	0	4.625	48.6	40.0	11.4	8.605		
		59.0	35.9	5.1		59.5	29.7	10.8		29.7	54.1	16.2	9.544		
	Q12 人の前ではにかむ	57.5	27.5	15.0	7.769	55.3	42.1	2.6	2.572	63.9	30.6	5.6	5.761		
		53.8	46.2	0		64.9	27.0	8.1		50.0	47.2	2.8	6.751		
	Q14 人前でのゲームを気にする	15.0	55.0	30.0	4.735	21.1	47.4	31.6	1.307	22.2	25.0	52.8	8.001		
		35.0	47.5	17.5		29.7	35.1	35.1		13.5	29.7	56.8	0.979	13.567	
	Q16 人との話題に困る	2.6	71.8	25.6	5.379	21.1	55.3	23.7	0.770	13.9	52.8	33.3	7.458		
		12.5	77.5	10.0		13.5	62.2	24.3		10.8	32.4	56.8	4.133	21.673	
	Q19 人が自分を好んでいるのか気になる	52.5	42.5	5.0	0.767	52.6	44.7	2.6	1.138	44.4	25.0	30.6	3.648		
		47.5	42.5	10.0		51.4	40.5	8.1		35.1	45.9	18.9	3.343		
	Q22 自分をよく思っていない人があるのではないかと気になる	57.5	37.5	5.0	2.381	55.3	36.8	7.9	4.200	44.4	27.8	27.8	9.999		
		47.5	37.5	15.0		32.4	51.4	16.2		29.7	45.9	24.3	2.780	3.831	
看護への適応	Q25 実習が好き	32.5	47.5	20.0	7.354	51.4	32.4	16.2	7.222	30.6	50.0	19.4	4.288		
		52.5	45.0	2.5		21.6	56.8	21.6		32.4	43.2	24.3	0.398	13.099	
	Q26 自己学習量は適量	10.3	46.2	43.6	1.044	5.3	39.5	55.3	1.666	13.9	13.9	72.2	10.535		
		7.5	37.5	55.0		13.9	33.3	52.8		10.8	56.8	32.4	15.104	5.924	
	Q32 看護職に誇り	72.5	22.5	5.0	0.397	50.0	44.7	5.3	0.944	38.9	47.2	13.9	10.348		
		76.5	20.5	2.6		51.4	37.8	10.8		59.5	35.1	5.4	3.584	6.363	
教師との関係	Q28 先生とのコミュニケーションがある	5.0	50.0	45.0	11.697	13.2	52.6	34.2	0.473	19.4	61.1	19.4	7.443		
		25.0	60.0	15.0		13.5	59.5	27.0		27.8	61.1	11.1	1.348	4.785	
	Q31 学校で相談できる先生がいる	27.5	47.5	25.0	0.865	21.1	21.1	57.9	1.292	27.8	36.1	36.1	9.825		
		20.0	47.5	32.5		16.2	32.4	51.4		40.5	40.5	18.9	2.930	11.842	
聖書的アプローチに対する反応	Q34 聖書は感謝の念を増させる	70.0	22.5	7.5	0.598	55.3	36.8	7.9	0.187	30.6	44.4	25.0	14.069		
		62.5	30.0	7.5		56.8	37.8	5.4		38.9	41.7	19.4	0.642	6.829	
	Q35 聖書は看護職に対する誇りを増させる	37.5	45.0	17.5	0.393	32.4	40.5	27.0	1.313	16.7	33.3	50.0	10.405		
		40.0	47.5	12.5		35.1	48.6	16.2		24.3	48.6	27.0	4.073	3.824	
	Q37 聖書は臨床場面で判断基準の指針	33.3	51.9	14.8	4.386	8.1	45.9	45.9	1.921	2.8	38.9	58.3	19.924		
		15.8	50.0	34.2		18.9	37.8	43.2		10.8	45.9	43.2	2.753	1.967	
	Q38 朝の祈りは力を与える	50.0	40.0	10.0	0.631	23.7	52.6	23.7	0.289	13.9	44.4	41.7	17.456		
		43.6	41.0	15.4		18.9	54.1	27.0		27.0	45.9	27.0	2.684	6.215	
	Q39 夕の祈りは感謝を与える	60.0	27.5	12.5	2.469	23.7	44.7	31.6	0.197	19.4	33.3	47.2	20.409		
		43.6	43.6	12.8		24.3	48.6	27.0		24.3	59.5	16.2	8.440	6.271	
	Q40 朝礼により自己肯定	40.0	50.0	10.0	0.223	13.5	59.5	27.0	6.854	22.2	30.6	47.2	18.447		
		45.0	45.0	10.0		40.5	40.5	18.9		29.7	43.2	27.0	3.201	4.337	
	Q41 聖書はケアの指針	54.1	35.1	10.8	2.533	27.0	51.4	21.6	0.111	8.3	44.4	47.2	23.653		
		35.9	48.7	15.4		24.3	51.4	24.3		13.5	54.1	32.4	1.793	6.263	
	Q44 聖書による葛藤	30.0	22.5	47.5	6.613	15.8	39.5	44.7	1.120	11.1	38.9	50.0	6.146		
		17.5	50.0	32.5		24.3	40.5	35.1		16.2	35.1	48.6	0.423	3.243	
	Q46 聖書と自己の不一致による葛藤	27.5	30.0	42.5	8.319	26.3	36.8	36.8	0.185	16.7	44.4	38.9	2.341		
		7.5	57.5	35.0		33.3	36.1	33.3		13.5	27.0	59.5	3.240	14.752	

* P<0.05

** P<0.01

2. バリマックス法による因子分析

バリマックス法による因子分析の結果、10因子が抽出された。図1-aから図1-jは、各因子のもつ意味を明確にするために、因子負荷量0.3以上の値をもつ項目を大きさの順に並べたものであ

る。

第1因子は、図1-aから、「聖書は看護職に対する誇りを増させる（Q35）」、「聖書は感謝の念を増させる（Q34）」などの項目が上位を占め、「聖書による看護への肯定的反応」に関する因子と考えられる。

図1-a 第1因子における因子負荷量0.3以上の項目

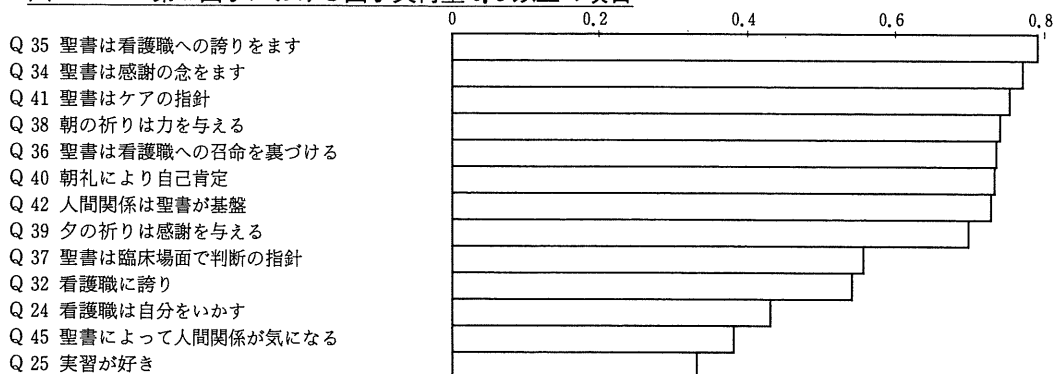


図1-b 第2因子における因子負荷量0.3以上の項目

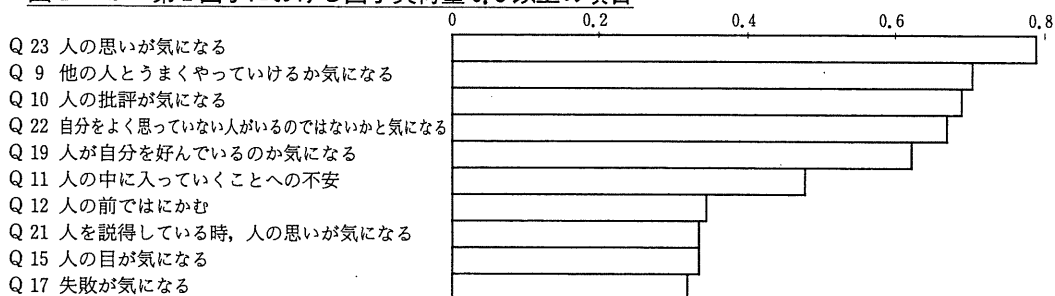


図1-c 第3因子における因子負荷量0.3以上の項目

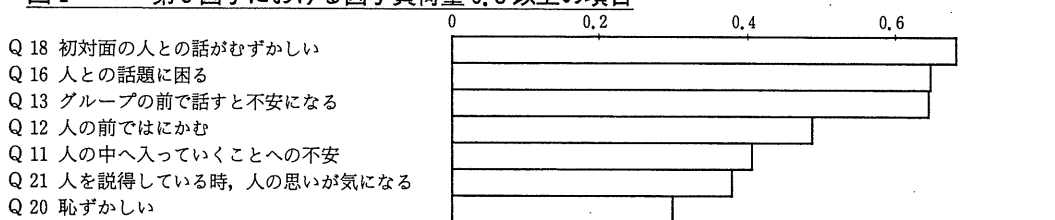


図1-d 第4因子における因子負荷量0.3以上の項目

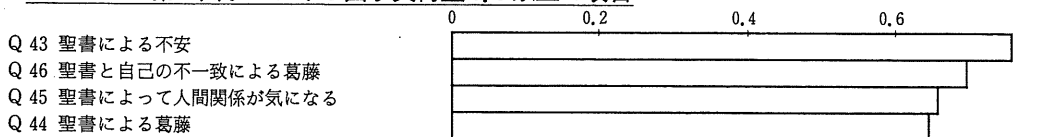


図1-e 第5因子における因子負荷量0.3以上の項目

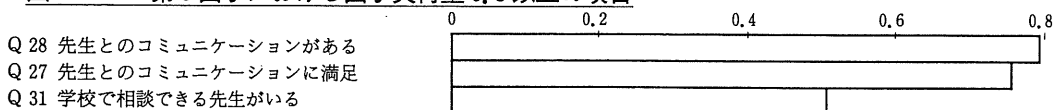


図1-f 第6因子における因子負荷量0.3以上の項目

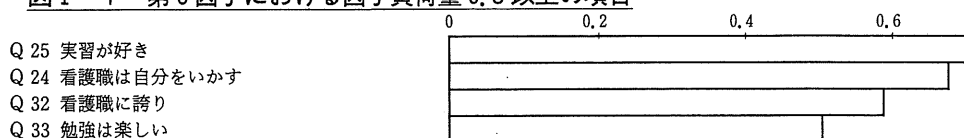


図1-g 第7因子における因子負荷量0.3以上の項目

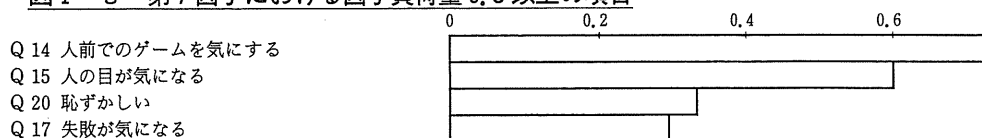


図1-h 第8因子における因子負荷量0.3以上の項目

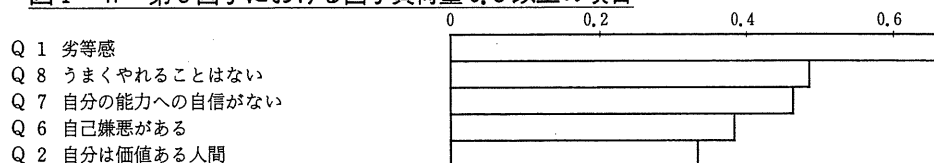


図1-i 第9因子における因子負荷量0.3以上の項目

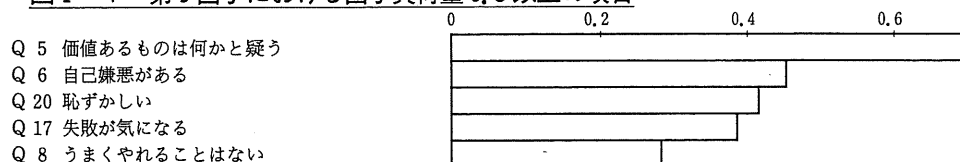
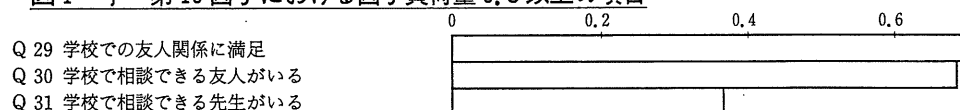


図1-j 第10因子における因子負荷量0.3以上の項目



第2因子は、図1-bから、「人の思いが気になる (Q23)」、「他の人とうまくやっていけるか気になる (Q29)」などの項目が上位を占め、「他人の目が気になる」に関する因子と考えられる。

第3因子は、図1-cから、「初対面の人との話がむずかしい (Q18)」、「人との話題に因る (Q16)」などの項目が上位を占め、「対人関係のむずかしさ」に関する因子と考えられる。

第4因子は、図1-dから、「聖書による不安 (Q43)」、「聖書と自己の不一致による葛藤 (Q46)」など、「聖書による葛藤」に関する因子と考えられる。

第5因子は、図1-eから、「先生とのコミュニケーションがある (Q28)」、「先生とのコミュニケーションに満足 (Q27)」など、「教師とのコミュニケーション」に関する因子と考えられる。

第6因子は、図1-fから、「実習が好き (Q25)」、「看護職は自分をいかす (Q24)」など、

「看護への適応」に関する因子と考えられる。

第7因子は、図1-gから、「人前でのゲームを気にする (Q14)」、「人の目が気になる (Q15)」など、「低い自尊心」に関する因子と考えられる。

第8因子は、図1-hから、「劣等感 (Q1)」、「うまくやれることはない (Q8)」など、「劣等感」に関する因子と考えられる。

第9因子は、図1-iから、「価値あるものは何かと疑う (Q5)」、「自己嫌悪 (Q6)」など、「自己嫌悪」に関する因子と考えられる。

第10因子は、図1-jから、「学校での友人関係に満足 (Q29)」、「学校での相談できる友人がいる (Q30)」など、「学校での友人関係」に関する因子と考えられる。

3. 因子得点の学年別、調査時期別の分散分析

各学年また同学年による7月と3月の各因子の差を調べるために、因子得点を求め分散分析を行

った(表4)。また各学年毎、調査時期による因子得点の平均値を、図2に示した。

表4. 学年毎、調査時期毎の各因子得点の平均値

	1年 (n=40)			2年 (n=38)			3年 (n=36)			3学年の	6グループの
	平均値	SD	t値 ¹⁾	平均値	SD	t値	平均値	SD	t値	F値	F値
Factor	0.504	0.872	0.74	-0.170	0.856	-1.21	-0.612	1.078	-1.65	13.742 ^{**}	7.203 ^{**}
1	0.349	0.982		0.069	0.857		-0.218	0.958		3.539 [*]	
2	0.346	0.847	1.60	0.249	0.858	1.38	-0.198	1.142	0.79	3.440 [*]	3.000 [*]
	0.011	1.016		-0.048	0.996		-0.397	1.019		1.801	
3	-0.216	1.103	-1.35	-0.022	1.054	-0.23	0.007	0.964	-0.55	0.521	0.564
	0.079	0.821		0.034	1.025		0.138	1.075		0.106	
4	-0.173	0.889	-0.20	0.161	1.143	-0.29	-0.015	0.970	0.20	1.077	1.019
	-0.132	0.954		0.236	1.055		-0.061	0.967		1.460	
5	-0.375	0.797	-2.70 ^{**}	-0.231	0.984	-0.67	0.142	1.013	-1.16	3.067	3.233 ^{**}
	0.143	0.914		-0.063	1.199		0.410	0.955		1.967	
6	-0.033	1.070	-1.23	0.203	1.004	2.52 [*]	-0.118	0.977	-0.57	0.993	1.842
	0.250	0.979		-0.345	0.871		0.015	1.012		3.743 [*]	
7	-0.071	0.997	-1.69	-0.006	0.991	-0.06	-0.032	1.150	0.77	0.038	1.103
	0.298	0.963		0.009	1.027		-0.218	0.883		2.800	
8	-0.262	1.299	-2.00 [*]	0.049	0.941	-0.75	0.067	1.070	1.70	1.062	2.099
	0.243	0.921		0.205	0.847		-0.304	0.762		4.878 ^{**}	
9	0.049	1.010	-0.11	0.038	0.980	0.69	0.067	0.978	0.71	0.008	0.301
	0.073	0.946		-0.138	1.217		-0.092	0.922		0.448	
10	0.051	0.922	0.77	-0.035	1.150	0.41	0.149	0.972	0.24	0.300	0.483
	-0.109	0.939		-0.139	1.046		0.094	1.014		0.597	

(上段 7月データ
下段 3月データ)

* P<0.05 ** P<0.01

1) 同一学年での平均値の差の検定

(等分散が仮定できない時は、ウェルチの検定)

1) 調査時期による因子得点の差

1年については、第5因子「教師とのコミュニケーション」において7月と3月に有意差(1%水準)が認められた。したがって1年は7月よりも8ヶ月経過した3月の方が、教師とのコミュニケーションが円滑であるとする傾向がある。これはクロス集計の結果(表3)とも、一致している。又、第8因子「劣等感」において、7月と3月の差は有意(5%水準)であり、3月の方が劣等感が強まる傾向が認められる。

2年については、第6因子「看護への適応」において、7月と3月の差は有意(5%水準)であり、3月の方が看護への適応が低くなる傾向が認められる。クロス集計の結果(表3)では、「実習が好き(Q25)」が51%から21.6%に低下している。

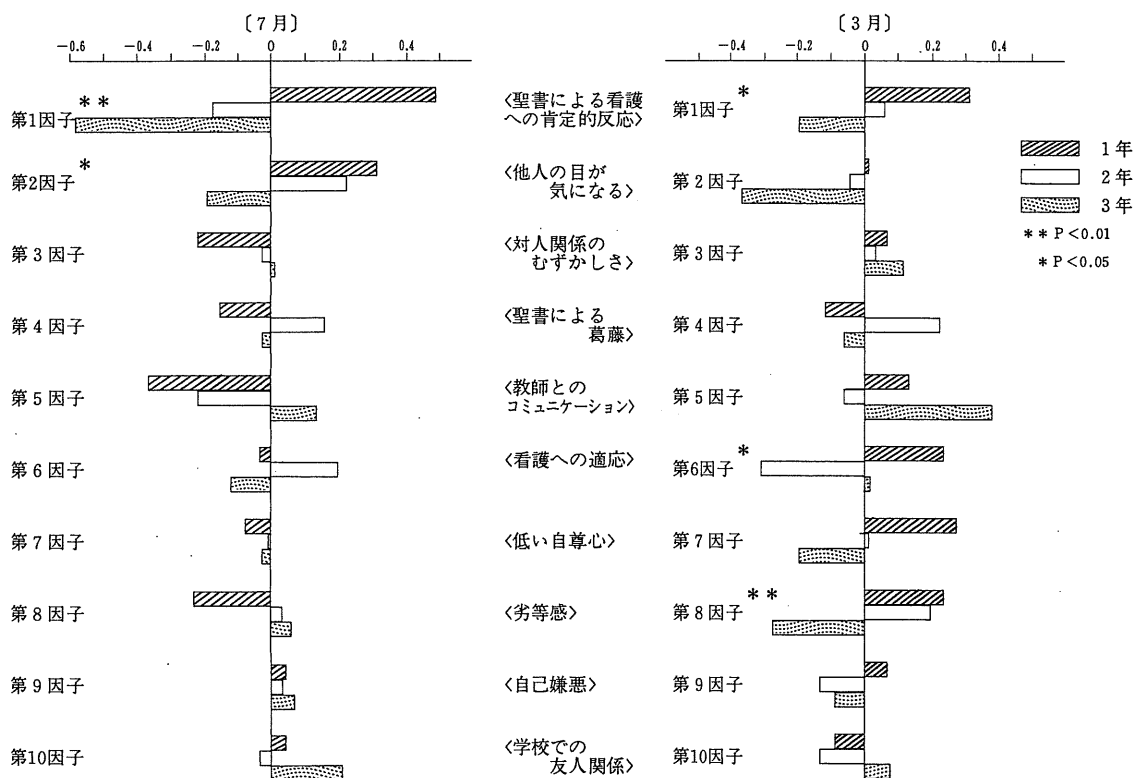
3年については、7月と3月の間に有意差の認められた因子はなかった。

2) 学年による因子得点の差

第1因子「聖書による看護への肯定的反応」において、各学年間に7月(1%水準)、3月(5%水準)共に有意差が認められた。7月、3月共に、平均値は1年が最高であり、2年、3年と高学年になるほど、低下している。これはクロス集計の結果(表3)とも一致している。

第2因子「他人の目が気になる」において、7月の各学年間に有意差(5%水準)が認められた。平均値は1年が最高であり、2年、3年と高学年になるほど、低下している。これとクロス集計の結果(表3)を比べると、「他人とうまくやっているか気になる(Q9)」、「人が自分を好んでいるか気になる(Q19)」、「自分をよく思っているか気になる(Q19)」

図2 7月、3月の学年毎の各因子得点の平均値



ない人がいるのではないかと気になる (Q22)」の回答と符合している。

第6因子「看護への適応」において、3月の各学年間に有意差 (5%水準) が認められた。平均値は1年が最高であり、2年が最低である。

第8因子「劣等感」において、3月の各学年間に有意差 (1%水準) が認められた。平均値は1年が最高であり、2年、3年と高学年になるほど、低下する傾向が認められた。

第5因子は「教師とのコミュニケーション」においては、有意差は認められなかったが、7月の調査時期では、高学年になるほど、得点が高くなる傾向がみられる。

IV. 考 察

調査結果により、いくつかの興味ある知見が得られた。そのうち因子分析による結果と、クロス集計の結果、すなわち、(1) 自尊感情、(2) 聖書的アプローチに対する反応、(3) 看護への適応、(4) 教師とのコミュニケーションについて以下に考察を加える。

1. 自尊感情

クロス集計の結果では、低学年になるほど、対人関係を気にする傾向がみられ、因子分析の第2因子「他人の目が気になる」でも、低学年ほど平均値が高く、3学年とも、7月より8ヶ月間経過した3月の方が低くなる傾向がみられる。

これは、7月の段階では、入学後まもなくであり、寮での2年、3年との共同生活、新しい教科による多くの教師との出会いなどに緊張していること、又、青年期は他人にとって自己がどのように把握・評価されているのかを重要視する時期であることなどによる影響があるものと考えられる。3年になると、自分の未熟さもある程度は客観視できるようになり、そのような自己を受容することが可能になる。これは、筒井 (1985)¹⁸⁾、山本 (1985)¹⁹⁾の結果とも類似しており、特に低学年に対しては、未熟な自己を受容できるようなアプローチも重要であると、考えられる。

2. 聖書的アプローチに対する反応

クロス集計の結果では、低学年になるほど聖書

的アプローチに対して肯定的な反応を示している。また、因子分析の第1因子「聖書による看護への肯定的反応」でも低学年ほど平均値が高かった。

本学では、全寮制による一貫教育を実施し、とくに聖書的アプローチは、青年期の発達課題、すなわちアイデンティティの確立を促すための道標として役立つように意図されている。すなわち、人間がどんなに未熟であってもかけがえのない存在であることを、1人1人が認め、未熟な自分があるがままに受容することによって、成人初期の発達課題、親密性の感覚が獲得されるように意図している。このような過程を通して、他者を1人の人間として価値ある存在と認め、尊重することへとつながり、人間を対象とする看護への認識をさらに深めるものと考えられる。

クロス集計の結果では、低学年ほど聖書的アプローチに対して肯定的な反応を示している。これは、アイデンティティの確立されていない学生にとって、聖書的アプローチが何らかの支えになっていることを示す可能性が高い。因子分析の第1因子においても、低学年ほど因子得点の平均値が高い。これは、第1因子の中に聖書的アプローチと看護の適応に関する項目が含まれており、高学年になるほど、聖書や看護の奥深さ、厳しさを認識し、その結果として平均値が低下するのではないかと考えられる。しかし、この問題については、更に今後の研究が必要であろう。

3. 看護への適応

クロス集計では、「実習が好き (Q25)」の項目において2年が51.4% (7月) から21.6% (3月) に減少している。因子分析の第6因子「看護への適応」でも、2年は7月よりも3月の方が低くなる傾向が認められた。これは3年制看護短大、3年制看護学校の2年生の時期に、小島、²⁰⁾ 坂口¹⁰⁾が行った研究でも同様の結果が示され、その他の研究結果とも類似している。^{8) 9) 18) 19) 21)} 本学においては、この時期は学習環境が講義中心から、実習中心となり、実習場での緊張、講義の実践への応用、実習記録などによる影響があるものと予想される。²²⁾ 2年の95.1%がカリキュラムが過密であると考えており、カリキュラムに関して検討する余地があると、伊藤ら (1985) は述べている。⁹⁾ これらの点から、2年に関しては、実習における教師のサポートが重要であると考えられる。

4. 教師とのコミュニケーション

クロス集計の結果から、2年は学校で相談できる先生が少なく、7月から3月にかけてさらに減少することが示された。因子分析の第5因子「教師とのコミュニケーション」でも、2年の平均値が低い。すでに、3. 看護への適応で述べたように、2年はストレス状況にあると考えられ、実習に関するサポートも重要であろう。^{23) 24)}

鈴木ら (1986) は、学生が実習をむずかしく感じることに関与する因子として、教師のあり方をあげ、実習場で教師が一方的に決めつけたり、待つことができない性急さは、学生を萎縮させると述べている。²⁵⁾ 波多野 (1986) は、教師中心の看護教育ではなく、学生中心の看護教育を主張し、教師が学生を知ることが重要であると述べている。²⁶⁾ これらのことを考慮すると、教師が学生を理解し、サポートすると共に、教師自身が自分の生き方を見つめていくことも、これらの問題解決にとって、とくに重要な点であるものと考えられよう。

V. 結 論

1. 因子分析

看護学生の自尊感情と、学習環境の受容に関する因子を調べるために、因子分析を行った。その結果、10の共通因子が抽出され、下記のように意味づけた。

- (1) 聖書による看護への肯定的反応
- (2) 他人の目が気になる
- (3) 対人関係のむずかしさ
- (4) 聖書による葛藤
- (5) 教師とのコミュニケーション
- (6) 看護への適応
- (7) 低い自尊心
- (8) 劣等感
- (9) 自己嫌悪
- (10) 学校での友人関係

2. 今後の課題

クロス集計、因子分析、分散分析の結果、今後の課題として下記のことがあげられる。

1) 自尊感情

1年は、アイデンティティの確立の途上にあり、

新生活開始後の時間も少なく、他人の目を気にする傾向がある。したがって、本来の自己をそのまま受容できるようなアプローチが重要であろう。

2) 聖書的アプローチに対する反応

聖書的アプローチは、アイデンティティの確立を促し、さらに看護の認識を深めるために重要であろう。しかし、高学年になるにつれ、聖書や看護への認識が増し、それがもつ奥深さ、厳しさもわかり、逆に聖書的アプローチに対する肯定的反応が低下するものと考えられ、今後さらに縦断的な研究が必要とされる。

3) 看護への適応

7月から3月にかけて、2年の看護への適応は低下する傾向がみられ、実習やカリキュラムの過

密による影響が考えられる。今後カリキュラムの検討、実習指導のあり方が課題と考えられる。

4) 教師とのコミュニケーション

7月から3月への経過と共に、2年は教師とのコミュニケーションが減少する傾向がみられる。2年は、実習も多くなり、看護の厳しさにも触れ、ストレス状況にあると考えられ、問題の解決には、教師のサポートが重要であろう。

さらに、教師自身が学生を理解することに努めるとともに、自分のありようを見つめることが課題となるものと考えられる。

以上の課題について、さらに吟味し適切な対処を行うためには、今後の縦断的研究が必要と思われる。

引用文献

- 1) Rogers, Carl R.: (村山正治編訳), ロージャズ全集12, 人間論, 初版, 26, 96, 岩崎学術出版社, 東京, 1968
- 2) Coopersmith, S.: The Antecedents of Self-Esteem, Freeman Publishing Company, San Francisco, 1967
- 3) Roy, Sister Callista: (松木光子, 丸橋佐和子訳), ロイ看護論, 初版, 243, メヂカルフレンド社, 東京, 1981
- 4) Rogers, Carl R.: (伊藤博編訳), ロージャズ全集8, パーソナリティ理論, 20, 43, 岩崎学術出版社, 東京, 1967
- 5) 和田サヨ子, 高木廣文: 聖書的アプローチの自尊感情に及ぼす影響, カトリック教育研究, No 3, 64—75, 1986
- 6) 花沢和枝: 学生生活の実態, 聖路加看護大学紀要, No 3, 1—15, 1975
- 7) 木場富喜: 看護学生の意識の変化に関する研究・1, 第9回看護学会教育分科会集録集, 44—49, 1978
- 8) 波多野梗子他: 看護学習および看護職に対する態度の発達の变化, 看護教育, 23: 8, 513—520, 1982
- 9) 伊藤暁子他: 看護学生の生活と看護教育に対する考え方, 看護実践の科学, 10: 3, 18—42, 1985
- 10) 坂口けさみ他: 看護短期大学生の生活の実態調査, 東京女子医科大学看護短期大学紀要, No 3, 33—43, 1981
- 11) 岡本英雄他: 進路選択状況調査報告 (III), 昭和56年度日本看護協会調査研究, No16, 1—30, 1981
- 12) 松木光子, 丸橋佐和子: 看護学生の臨床実習における精神安定と看護観の変容について, 大阪大学医療技術短期大学部研究紀要, 自然科学・医療科学篇, No 5, 85—101, 1977
- 13) 松木光子: 看護学生の精神衛生管理について, 看護教育, 18: 11, 689—692, 1977
- 14) 島内節他: 看護教育課程別にみた学生生活に対する意識と態度, 看護研究, 7: 4, 409—420, 1974
- 15) 中西信男他編: 心理学10, 自我: 自己, 初版, 197—210, 有斐閣双書, 東京, 1981
- 16) 柳井晴夫, 高根芳雄: 現代人の統計2, 多変量解析法, 118—120, 125—128, 朝倉書店, 東京, 1977
- 17) Nie, Norman H., et al.: Statistical Package for the Social Sciences, Second Edition, 468—514, McGraw-Hill Book Company, 1975
- 18) 筒井真優美他: 看護学生の自尊感情と学習環境に関する調査, 全国看護教育研究会誌, No17, 3—15, 1985
- 19) 山本よしゑ他: 看護学生の看護職へのアイデンティティの形成過程, 第16回看護教育, 140—142,

1982

- 20) 小島禮子：看護学生の職業意識の形成に関する研究，看護研究，8：1，46—81，1975
- 21) 玉木ミヨ子他：臨床場面における態度育成の教育方法，看護展望，11：6，73—76，1986
- 22) 森田チエ子，島内節：看護学生の臨床実習に対する認識の変容過程と学生・指導者間の認識の関係，看護教育，18：9，539—547，1977
- 23) Dawson, N. :Hours of Contact and their Relationship Students' Evaluations of Teaching Effectiveness, Journal of Nursing Education, 25：6, 236—239, 1986
- 24) 南裕子：学生の理解，全国看護教育研究会誌，No16，66，1984
- 25) 鈴木正子他：内科看護を“難しい”と感じた学生の実習中における患者・看護婦・教員との関係，ナースステーション，16：1，90—95，1986
- 26) 波多野梗子：看護教育のめざすもの，看護教育，27：8，472—482，1986